水中写真家
トニー・ウーの捉えたクジラの王国

トンガ

Take me to Tonga!

photo Tony Wu　Text Tony & Emiko Wu

生後間もない子クジラを頭に乗せて、水面で休息させる母クジラ。深い愛情を感じる

Design : PanariDesgin

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Information Link http://www.tonywublog.com/ clicki 関連情報HPへ

絶好のクジラスイム日和に出会った フレンドリーな親子

ウォッチングボートでクジラの生息海域に向う

ローカルの人々の交通手段であるボートは沈みそうなくらいの人を乗せて、島々の間を移動する

ボート上からクジラのブローを探す

窓のカーテンの隙間からこぼれる眩しい光で眼が覚めた。普段は朝が弱い私。でも、こんなに明るいとカーテンを開けて外の景色が見たくなる。眼下に広がるヨットハーバーの海は穏やで、対岸の山のヤシの木々は風に揺られていない。今日は絶好のクジラスイム日和だ。よし、頑張ってクジラと泳ぐぞ。気分がぐっと高まってくる。

桟橋には、早くも準備を済ませた皆んながボートを待っている。トンガのホェールスイムは実質4日間。限られた日程の中で、フレンドリーなクジラと泳ぎたい、また思い描いた写真を撮りたいと、期待に胸を膨らませて日本から何十時間もかけてやってくる。ボートに乗船する時、私は皆んなの期待感をひしひしと肌で感じる。ガイドとして気合いが入る瞬間でもある。

ボートを走らせると、毎日地元の船とすれ違う。私より何倍もある体格のいい村民たちは所狭しと座っており、今にも沈みそうなボートから皆んなが手を振って来る。トンガ人は、とても温和で人情味ある人たちなのだ。

ヨットハーバーを出ると、もうそこはクジラが泳ぐテリトリー。どこにいてもおかしくない。私は、スパイホップ号のルーフに上がり、地平線をなぞる様に何度も目を凝らして探し始める。同時に心の中で、「クジラよ、出て来〜い」と願う。

雲ひとつない青い空、太陽は碧い海を照らす。このピュアな碧さは、息をのむ程美しい。自然溢れるトンガの碧海で、母クジラは子クジラを産み、子育てをする。島々に囲まれた環境は、外敵から守りやすく、時に彼らの休養場所にもなっているのだろう。

クジラを探す方法はいくつかある。代表的なのはブロー。水面に上がって来て息をする際、潮の霧が空中に舞い上がる。ブリーチングは、巨体が水面からジャンプして大きな水しぶきを上げるので遠くからでも見つけやすい。背びれで見つける場合もあるが、お天気が悪かったり、波が荒れていたりすると難しく、時にイルカだったりする事もある。

私達のボートは島の外側に出た。数時間、島々の中を走らせたがクジラがいる気配が全くない。「こんなに海がいい状態なのにどうしたんだろう?」不安がよぎる。もちろん、野生相手なので同じ場所に同じクジラがいる訳がない。いつしかサングラスから覗く眼差しがきびしくなっている自分がいた。ボートの中では、おしゃべりしてる声が聞こえない。キャプテンも無口になり操船しながら前方、後方、左右と首を動かしながら探している。

8月の南半球の気候は冬だと言うのに、日差しは強い。日焼け対策を常にしなければといつも思っているのに、クジラを探していたり、また一緒に泳いでいるとすっかり忘れて、帰国後、毎回後悔の日々を送ってしまう。「クジラはどこだ?」そう思いながら、時間と共に顔はジリジリと日焼けしていく。

と、その時、一瞬だったが200メートル程沖に小さな飛沫が見えた。「気のせい?」。ボートはそのまま動いているが、私の体だけ飛沫が上がった方角に向きを変え、目はその方向を見つめた。実際、気のせいの時もあるし、魚が飛び跳ねてたのかも知れない。または、波と波がぶつかって小さな飛沫が上がっていたのかもしれない。早く「クジラ〜!」って叫びたいところだが、確信が持てる迄は誰にも言えない。早まる気持ちをじっと押さえるのは忍耐力がいる。そういう意味で、私の忍耐力はこの地で毎年培われてるみたいだ。

数分後、やっぱりクジラだ。興奮のあまり大声でキャプテンを呼んでしまった。ボートは急旋回、全員は沖に目を向けた。すると、なんと子クジラが腹這いになって遊んでいるではないか。母クジラは水面下にいるらしい。近くに寄ると、この親子は、逃げもせず逆にボートに近寄って来たとてもフレンドリーな親子だった。暫くすると、母クジラは子クジラに泳ぎ方を教えている姿を目の当たりにした。母がブリーチングすると、子クジラもブリーチングらしきものをする。母がスパイホップすると、子クジラもちょこっと顔を出す。何とも言えぬ、ほのぼのとした愛しい姿だ。ボートの上からは、女性達が張り出す黄色い声で賑やかだった。

（tetx=Tony）

穏やかな水面でのんびりと遊ぶ子クジラを発見した

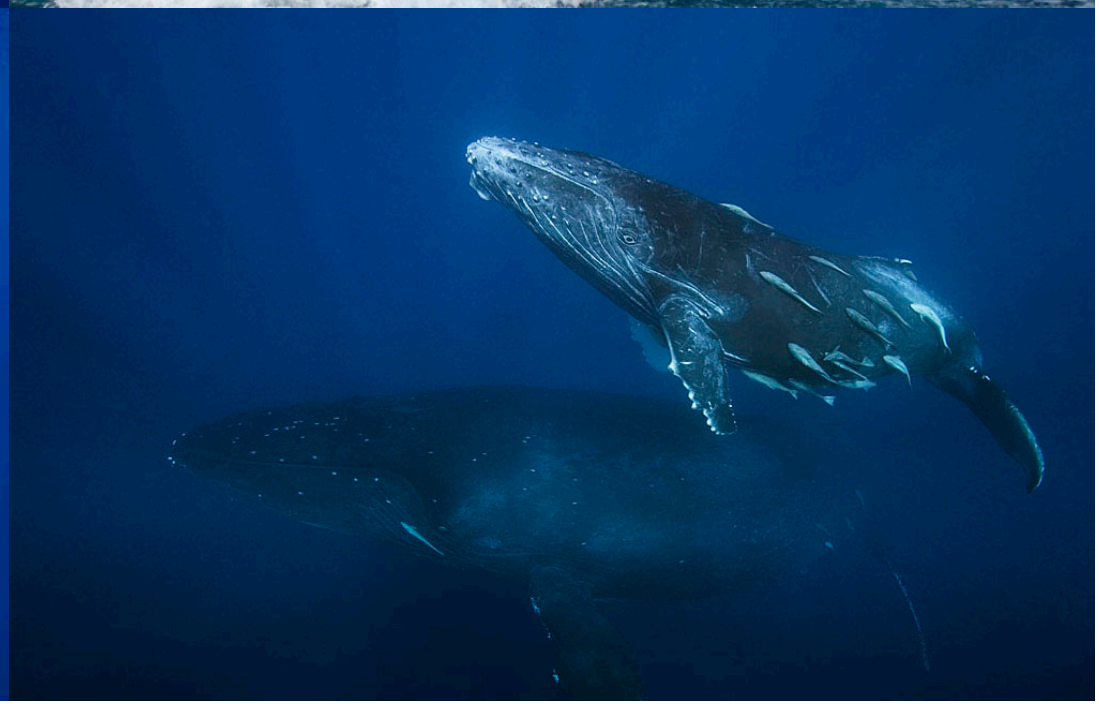
クジラスイミングを楽しむ参加者たち

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

トンガ語で「白い」という意味の名前をつけることにした、子クジラ。滞在中何かこの親子に遭遇することができた

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Information Link click 関連情報HPへ
http://www.tonywublog.com/



母クジラの周囲を嬉しそうに泳ぎ回る子クジラ（左上）
母クジラの元から離れて、ダイバーに興味を示して近寄ってきた子クジラ（左下）

2頭同時にテールスラッピングをくりかえす、珍しいパフォーマンスを見せてくれた（右上）
トンガでは、身体中にコバンザメを付けているクジラを多く目にする（右下）

水中写真家 トニー・ウーの捉えたクジラの王国

Take me to Tonga!

Web-lue 2008 Winter

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

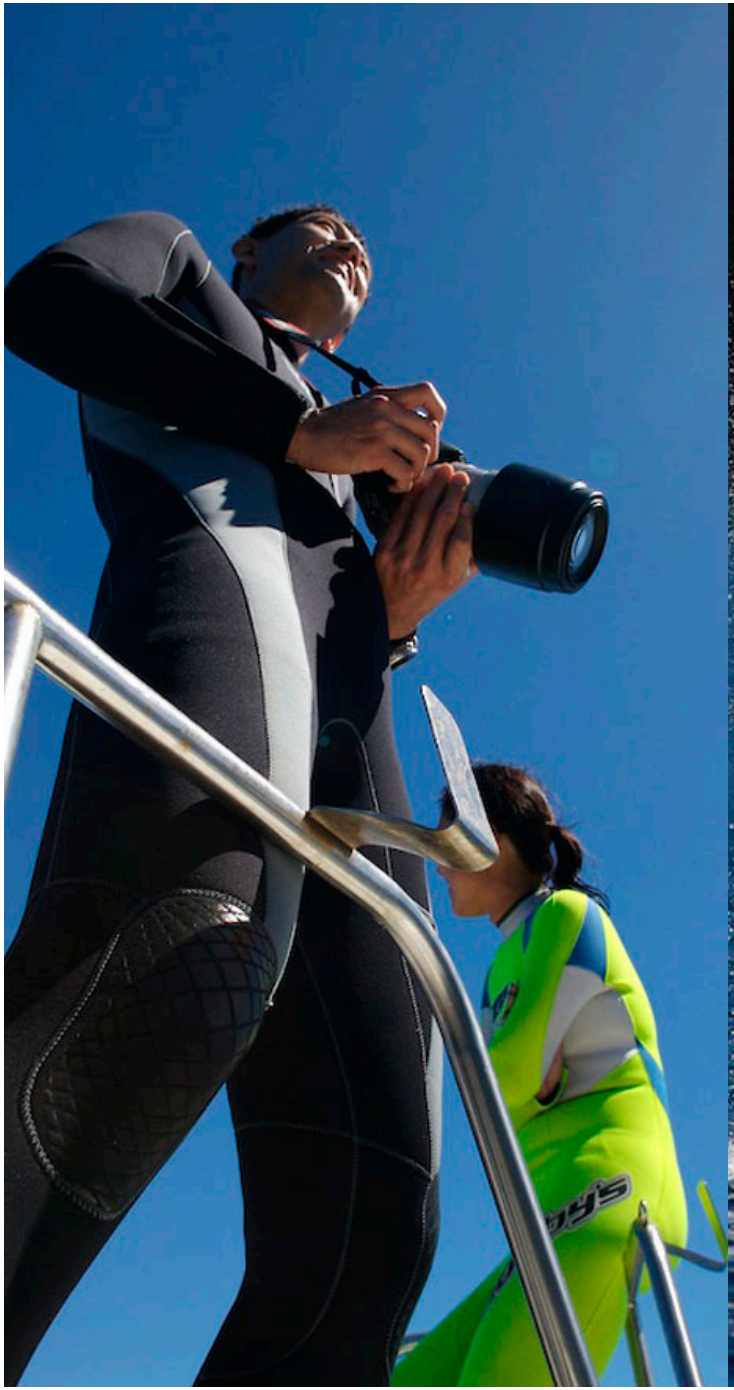
Information Link click 関連情報HPへ
http://takaji-ochi.com

ボートの目の前で大人のクジラがブリーチングを見せてくれた。
迫力に圧倒する

水中写真家 トニー・ウーの捉えたクジラの王国

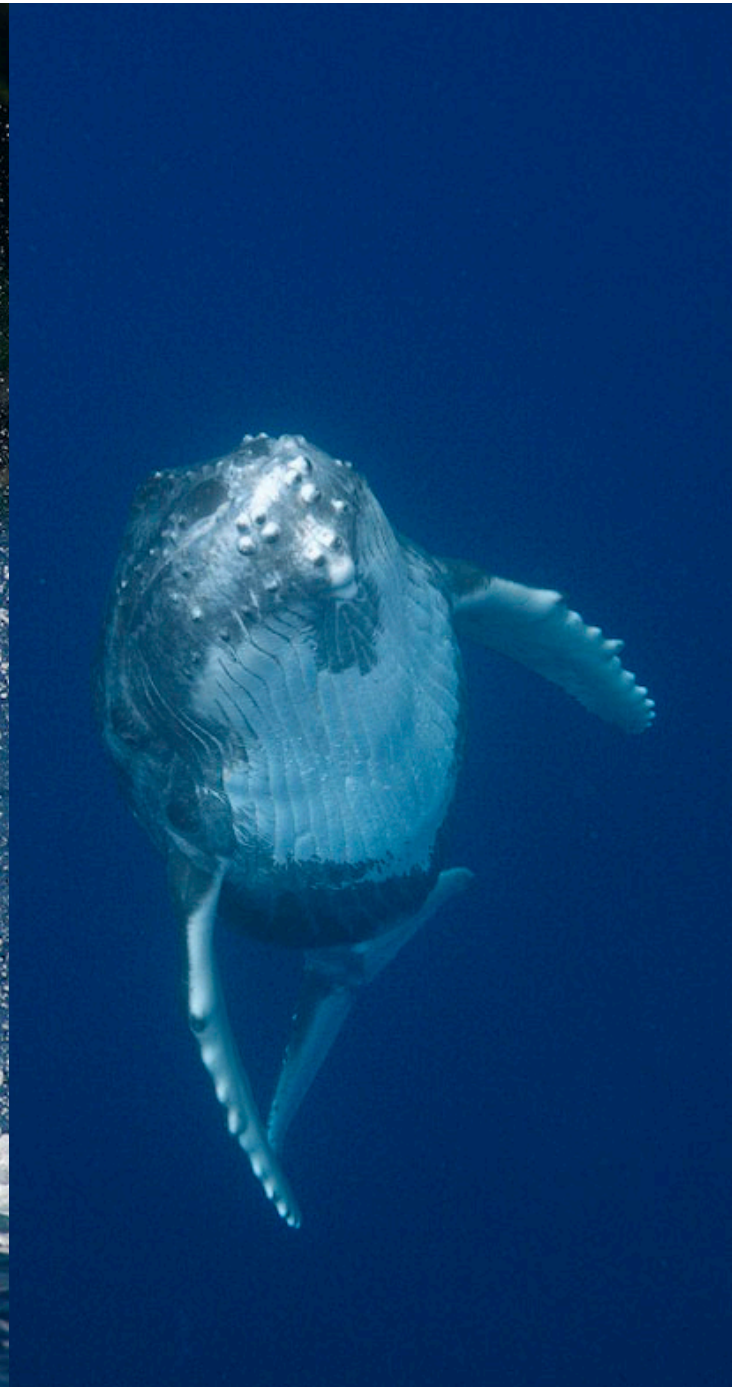
©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Information Link clicki 関連情報HPへ
http://www.tonywublog.com/



トップデッキから、クジラのブリーチング撮影のチャンスを狙う

子クジラは、何度も何度もテールスラッピングをして見せてくれた



海中に眠る母の元から、呼吸のために、ゆっくりと浮上してくる子クジラ

水中写真家 トニー・ウーの捉えたクジラの王国

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Information Link click 関連情報HPへ
http://takaji-ochi.com

ペアを追尾して泳いでいると、突然後方にいたクジラが、水中でテールを横にスライドさせて、威嚇してきた（左上）
母に寄り添いながら、移動する子クジラ。母クジラの下には絵スコートが行動を共にしていた（左下）

数頭のオスが、1頭のメスを巡って、ヒートランを繰り広げる（右上）
好気心旺盛なペアは、時に腹部をこちらに向けてたりしながら、しばらく一緒に泳いでくれた（右下）

水中写真家 トニー・ウーの捉えたクジラの王国

Take me to Tonga!

Web-lue 2008 Winter

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Information Link click 関連情報HPへ
http://www.tonywublog.com/

トンガ王国は、フィジーとサモアの間に位置し、南太平洋に浮かぶ約176島群からなる国であり、大きく3つの群島に分かれている。人口は約11万人。トンガ人はとても信仰深く、日曜日になると早朝から島中の人々が近くの教会に足を運ぶ。公用語は、トンガ語と英語。18世紀にイギリス人海洋探検家、ジェームズ・クックの来航が大きく影響している為、英語を話す人が多い。最近では、英語圏の隣国、オーストラリアやニュージーランドの影響を受けて、子供達も英語を話す。しかし、英語だけではなく最近は、日本語を勉強する子供達もいるのだ。JICA(国際協力機構）は、トンガに日本語教師、音楽の先生や歯医者などを派遣している。また、数年前からホエールスイムを楽しみにトンガに来る日本人も増えてきた。島を歩いていると、現地の若者が覚えたての日本語を話してくる。以前、私も外国人に日本語を教えていたので、頑張っている青年に出会うと心から嬉しい。

初めてトンガでクジラと泳いだのは9年前。今は運行していないクルーズ船で、トンガの首都トンガタプからクジラが集まる250キロ離れたヴァヴァウ島までやって来た。真夜中のクロッシングは、こんなに過酷とは知らず、トニーと私は地獄に落とされた気分だった。大荒れの海峡で、船がひっくり返るのではないかと心配するのもつかの間、船酔いが襲って来た。十数時間後、船は無事にヴァヴァウ島には着いたが、外は厚い雲に覆われ、寒くて甲板に出られない。「クジラと泳ぐよ」とガイドに呼ばれて気分がすぐれないまま荒れた水中に入ったが、水温17度とめちゃくちゃ冷たい。寒さとの戦いで、今ひとつクジラをよく見れてない。「感動?」そんなものは無かった。帰路は、お願いして飛行機で帰った。2度とトンガに来るものか……そう、その時は思っていた。

なのに、毎年トンガのクジラに会いに1ヶ月以上滞在している自分がいる。何故だろう?

それは、2年前の出来事が大きく自分を変えたからかもしれない。ある暖かい午後の日、アメリカ人の友人とトニーの3人でクジラを探していたら、先方にぽっかり浮かぶ2本の丸太ん棒の様なものを見つけた。なんと、親子が眠っていたのだ。物音立てずに静かに水中に入る。2頭のクジラは目を閉じて全然動かない。私達もむやみに動かず親子を見守った。これが、吉と出た。母クジラは、私達がいるのに気付いているが別にお構いなくじっとしている。私は、ビデオカメラを持って親子クジラの周りを3回もぐるりとしながら撮影した。ベテランキャプテンは、「こんな状態はめったに見た事ないよ。ラッキーだね」と言った。長時間水中にいたので、手の平は一夜干しした梅干みたいにふやけていた。この時の協力的な親子クジラとの出会いは、過去に経験した苦いトンガの思い出をいつしか打ち消していた。最近、こう考える様になった。さて、私達より遥かに大きな野生のクジラと一緒に泳いだ人は、いったい世界中で何人いるだろうか?何はともあれ、私は、トンガのザトウクジラにはまってしまった1人だ。

現在、クジラと一緒に泳げる国は数える程である。トンガは、一度に水中に入れる人数の制限はあるものの、長年の経験から遭遇率は高い方だと思う。クジラが集まるシーズンは7月から10月。

南半球のザトウクジラは胸と胸びれが真っ白なので、碧い海と調和して増々優雅に見える。クジラの行動は個々違う。好奇心旺盛なクジラ、シャイなクジラ、完全私達を無視するクジラなど様々である。クジラスイムは難しくはないが、楽しむには最低スノーケリングが出来る事と多少は泳げるスキルがある方がいい。いかに長く一緒に泳ぐか。これにはコツがある。トニーは6、7年トンガに通い続け、一緒に泳ぐうちに彼らの行動パターンや生態知識を得る事が出来た。そして、クジラに負担をかけずにアプローチする泳ぎ方のコツを掴んだ。これは、経験が為す「技」と言っていいと思う。私の知る限り、初めてトンガを訪れた人でさえ、なかなかいいクジラ写真を撮っていたのは、嬉しい反面羨ましかったりする。

日本からトンガまでの行き方は、一般的に、ニュージーランドのオークランドで1泊。翌日、トンガの玄関口トンガタプから国内線でヴァヴァウ島に入る。ホエールスイムは翌日からとなる。トンガのお天気は変わりやすい。気温は、朝晩涼しく日中は暑いが雨が降ると急に寒くなる。ニュージーランドは真冬なので、真夏の格好のまま日本から来ると大変辛い思いをするので、防寒着は持参しよう。

日本からとっても遠い国だけど、そこには、クジラが待っている。そこには、人情味あふれるトンガ人がいる。そこには、手が届く程、南十字星や満天の星空がある。私はトンガが大好きである。

（txt=Emiko Wu）

ジェティーでウォッチングボートの到着を待つ人々

ホエールスイムのできる数少ない国、トンガに魅せられて

島に住む子供たちは、無邪気でかわいい

若者たちも、カメラを向けると嬉しそうにポーズを取って笑顔を見せる

ホエールスイムの合間、地元の人たちとの交流も島での楽しみ

©WEB-LUE ウエブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます